アブドッラ　ブン サラ ム マディ ナの元ユダヤ教ラビ

:

明:ユダヤ教のラビとしての最初の改宗者が、いかにイスラ ムへと改宗したか。

目: 事新改宗者ムスリムの逸　者と宗教的 威

より: アブドッラ　ブン サラ ム

日29 Dec 2014

集日 29 Dec 2014

アル＝フサイン ブン サラ ムは、ヤスリブ（マディ ナ）のユダヤ教ラビでした。彼はユダヤ教徒でない人々からも、 く尊敬され敬意を示されていました。彼はその敬虔さや善良さ、 直な振る舞い、正直さなどでよく知られていました。

アル＝フサインは平 な人生を生きましたが、彼は　の使い方においては真 かつ目的意 にち、万全を期していました。彼は礼 堂において、 日 められた　に崇 行 や教育、そして 教をしました。

彼はそれから果　に出向き、ナツメヤシの木を刈り んだり、受粉させたりしたものでした。その 、彼は自分の宗教への理解と知 を深めるため、ト ラ の研究に没 しました。

彼は研究の中で、 去の　言者の教えを完遂させる一人の 言者の到来についての 々に得に感 を受けていたと言われています。それゆえ、アル＝フサインはマッカで 言者が れたという 告に し、直ちに い 味を示しました。

以下は、彼自身の言 による彼の逸 です

神の使徒（神の慈悲と祝福あれ）が れたというという 告を耳にした私は、彼の名前、系 、性格、生年月日や出身地などについて　し、それらの情 と私たちの 物にあるものと

を比 し始めました。

それらの　から、私は彼の 言者性が正 なものであることを 信し、彼の使命の真 性を めました。しかし、私はユダヤ教徒たちに しては、自身の　について していました。私は口を ざしたのです。

そして 言者（神の慈悲と祝福あれ）がマッカを ち、ヤスリブへ向かう日が来ました。彼がヤスリブに着き、クバ に立ち寄ると、ある男が大急ぎで町に け み、 言者の到来を人々に知らせて回りました。

私はそのとき、ナツメヤシの木に登って仕事をしていました。私の叔母ハ リダ ビントアル＝ハ リスは木の下に座っていました。知らせを受けた私は叫びました。「アッラフ アクバル！ アッラ フ アクバル！ （神は 大なり！ 神は 大なり！ ）」

それを いた叔母は私をいさめてこう言いました。「神があなたを失望させますように。神にかけて、もしあなたがモ ゼの到来を いたとしても、それほどまでは　しなかったでしょう。」

「叔母さん、神にかけて、彼こそは、モ ゼの宗教に う彼の“兄弟”なのですよ。彼はモ ゼと同じ使命によって遣わされたのです。」彼女はしばらく沈 した 、こう言いました。「彼はあなたが私たちに言っていた、 去の　言者たちの教えの真理を　し、主の教えを完遂させるために遣わされるという例の 言者なのかい？ 」

私は言いました。「そうです。」

私は全くの 延やためらいもなく、 言者に会いに行きました。私は彼の扉の前に群 が集まっているのを ました。私は群 をかき分け、彼の近くに辿り着きました。

私が いた彼の最初の言 は、こうでした。「人々よ！ 平和を めなさい。食べ物をほどこしなさい。人々が（通常）眠っている夜 に礼 を捧げなさい。そうすればあなたがたは平安と共に、天国に入れるでしょう。」

私は彼を注 しました。じっくりと吟味した 、私は彼の が 欺 のそれではないことを 信しました。私はさらに彼に近づき、「唯一なる真 の神以外に神はなく、ムハンマドは神の使徒である」という信仰告白を行いました。

言者は私の方を向き、こう ねました。「あなたの名前は? 」私は答えました。「アル＝フサイン ブン サラ ムです。」彼は言いました。「これからは、アブドッラ　ブン サラムと名 りなさい。」私は同意し、こう言いました。「はい。これからはアブドッラ　ブン サラ ムと名 ります。あなたを真理と共に遣わした御方にかけて。今日からはこの名前以外には新たな名を持ちません。」

私は 宅し、妻、子供たち、そして家の者たち全 にイスラ ムを 介しました。当 、既に老年に していた叔母のハ リダを含め、彼らは皆イスラ ムを受け入れました。しかし私は、私が 可を出すまで、自分たちがイスラ ムを受け入れたことをユダヤ教徒たちには しておくよう、彼らに告げました。彼らはそれに合意しました。

その 、私は 言者（神の慈悲と祝福あれ）のもとに り、こう言いました。「神の使徒よ。ユダヤ教徒たちは　中 と虚 の（ 向がある）民です。どうか彼らの中で最も重要な人物を招き、面会して下さい。（そして面会 に）あなたは私を の部屋に匿っておいて下さい。彼らには、私がイスラ ムを受け入れたことを知らせる前に、彼らの における私の地位についてお ね下さい。それから、彼らをイスラ ムにお招き下さい。私がムスリムになったということを彼らが知れば、彼らは私を非 し、あらゆる卑劣な　をし、中 することでしょう。」

言者は の部屋に私を匿い、ユダヤ教徒の重要人物を招き入れました。 言者は彼らにイスラ ムを 介し、神への信仰心を持つよう促しました。

彼らは真理について、 言者に口を挟み、　を始めました。彼らがイスラ ムを受け入れはしないことを悟った彼は、彼らにこう　をしました。

「あなたがたの における、アル＝フサイン ブン サラ ムの地位はどういったものなのですか? 」

「彼は我々のサイイド（指 者）であり、我々のサイイドの息子でもあります。彼は我々のラビであり、ア リム（学者）であり、我々のラビとア リムの息子でもあります。」

そして 言者は ねました。「もし彼がイスラ ムを受け入れたことをあなたがたが知れば、あなたがたも同 にイスラ ムを受け入れますか? 」

彼らは仰天してこう言いました。「神がそれを禁じ いますよう!
彼はイスラ ムを受け入れたりはしません。イスラ ムを受け入れるなどといったことから、神が彼をお守りになりますよう。」

そしてそのとき、私は彼らの前に姿を表し、公言しました。「ユダヤ教徒の集まりよ!
神に意 を寄せ、ムハンマドがもたらしたものを受け入れるのです。神にかけて、あなたがたは彼が神の使徒であることを かに知っているはずです。あなたがたのト ラ には、彼についての予言と彼の名前の言及、そして彼の性格について 出すことが出来るのですから。私自身に しては、彼が神の使徒であるということを宣言します。私は彼を信 し、彼が本物であると信じています。私は彼を知っています。」

彼らは叫んで言いました。「お前は嘘つきだ。」「神にかけて、お前は邪 かつ 知な男で、邪 かつ 知な男の息子なのだ。」そして彼らはありとあらゆる 詈 言を私に浴びせ けました。

ここで、彼自身の逸 は わります。

アブドッラ　ブン サラ ムは知 を 望する魂と共にイスラ ムに近づきました。彼はクルア ンに情 的に献身し、その美しく崇高な 々の研究と朗 に多くの　を やしました。彼は高 なる言者に深く 着を感じ、常に彼に付き添いました。

また彼はマスジドで多くの　を ごし、崇 行 に耽り、学 と教育にも携わりました。彼は 言者モスクにいつも集まっていた教友たちへの学 会における、素晴らしく、刺激的かつ

率的な教育方法によって知られていました。

アブドッラ　ブン サラ ムは、教友たちの中でも天国の民の一人として知られています。なぜなら、彼は「最も信 の置ける取っ手」にしっかりと掴まるという、 言者の助言に忠 であったからです。それはつまり、神への完全な服 への信仰なのです。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/jp/articles/1692

著作　2006-2015 断　を禁じます。　2006 - 2023　IslamReligion.com. 断　を禁じます。